へ13
3157
13

東都　曲亭主人編次

第二十五回

満家計罔維轎を遣る
維盈囚を投石ふ免ふ

再説大徳寺の沙弥一休。姑麿姫を刑戮の評議に就て義持主ふその好ミを問きかば一休答てさン。貪道新作の譬諭品あり。上のあん與ふ講ぜゞ。昔一個の婆羅門あり。世尊ふ出家の功徳を問ひふ世尊答のまう。出家ハ慈悲を功徳とし縱ひ五逆の罪人ゝをも。そを教化ゝ悪を洗せ垢の善信士女と做ぜゞ。是如來の本願なり。あゝとのゝ五戒の内中ふ殺生を第一義とも。俗家ハ殺ゝ法律あり。人の一人を殺ゝ死ハ。その殺ゝる人を殺ゝその死を償ざるとき。人の一人の財を竊めゞ。その盗賊を捕殺ゝ罪を倡悪を懲らも是所云法律なり。その故ふその罪ふ死るのミなれとも罪人ハ。絶

ぎ甚しきに至りてはその刑罰の場に于て人の懐ふせ東西に撥攫ふ須利草あり是ふ由く親るとえいその法度を犯きに及びて捕てこれを殺さんより先まづ犯さざる前に教へて善人ふ做さしめんこそ然ればこそ孔子もいまだ訟を聽くに吾猶人のごとし必や訟なからしめんとぞ佛の慈悲儒の仁義欲まる所一理に元弘建武の擾乱より今に至りて七十餘年残暴弑逆せざることなく黨を結びて徒党を征し人を殺しその郡縣を奪ふとみつかう賢とし法度ふ憑まざ律令を屑とせざ大道廢れて仁義なも廢れて孰か天日と親るうあらんや事極れば変易ふ這時民ふ父母さるの慈悲廣大阿弥陀の如く忠恕惻隠孔子の如く殘ふ勝殺を去り衆生の與ふ悪を洗ひて教へて殺さるくる世の人通て恥を知りて兼愛して殺を嗜ぎ暴行竊盗漸次ふ絶て國家是より泰平なんぞ蓋一人の御心ふ千萬人の心その故ふ上の教ふ所ふ民必これを学び上の欲ふ主ふ所ふ民も亦これを欲ふ猶その子ふ父母の教ふ憑り慾とその親ふ倣ふごとし是則民ふ

父母ふ人君の專教ふ譬ば今將軍ふ衆生の為ふ阿弥陀のごと既ふその職阿弥陀ふ似て毫も阿弥陀の慈悲ふ木偶ふ不及とせば欲そを甚麽ぞとふ木偶ふ信を必是利益あり形状偶ふ似れば世ふ堯舜さるのも堯舜の服を衣く堯舜の事と紛へば便是ふ堯舜と儒者のいーもその理ふ最憚ある言ふ阿弥陀の慈悲を御心ふ一切衆生を亦肉ふ木偶ふ優を利益ふ小鳥ふ慈悲心ある人とて慈悲ふ天飛ぶ鳥の名ふも恥べ。況ども生賢ふ衆人ふ愚夷を迂遠とて冷笑ふもいん下士道を学げこれを笑ふ笑ふ道とふ足ふ足と列御寇ふ問ふ是ふ抑一年の計ふ元日ふ妻ふ誨ふ初見ふ在り饒ふかくを饒ふ仁政今より初めふ是元日より節倹ふて年中その利ある如く初見より妻ふ誨まば生涯家法ふ道ふと亦何ぞ異ふ昔唐山ふ晉の趙無恤ふ義士豫讓を殺さんとて趙氏是より盛ふ漢の高祖ふ田横を誅せんとて國安ふ四百餘年の

へ13
3157
13
特

基を開け。這義ふよりて左も右も寛仁の御沙汰あらば。當家の御武運長久なん。
貪道けふ師父の命せ。緊西苦の法教あり。身の暇を賜べ。とふ義持留めかね
示教の趣道理ふ稱う。老臣們ふあくろるさて。穩便の沙汰ふ及ぶべ。昨夜の功德感
ぎるふあまりつの。大義ふて七と労ひく。近習ふ送らしめけり。既ふと義持主を一休の壁
諭方便ゆ。怒十二分ふ解しかば。管領四職を召取合て。御向ふ禁獄しる姑麽姫ゆ
ゆ。ばらくと思惟ふ他い楠の餘類とへども。絶よ一個の少女。且その進止の奇怪ゆ。
他ゆ昨夜の狼籍い現道將斯波義將の法名。の監定の如く。物の怪ゆどの所為ゆあらん罪の
疑しれい殺さぎとふ本文もこれあれば放ちて故郷還さべ。汝達這義を何ぞ思ふと問
きて大家異議もるく。寛仁大度の御善政あるうへやいえ。然でも野心を改ぎて。以後
又不軌の企えあらばその折誅しのふとも遲かるべ。実ふ赦免の恩命ふ有かく
そふへと衆口弁一答へる。そゆ中ふ満家鮫山。の眉根を顰め沈吟て。衆議既ふ

異同ゆ。御說と返しなるふ恐れあるふ依れども。唐山ふ婦人ゆ。唐賽児ゆんゆ。
げ者ゆさどう。幻術左道と称ひる。叛逆のふれあり。とゆけば。那姑麽姫ゆム。
べらば。縱今番の一大奇事い。幻術左道の所為ゆ。狂疾鬼病の所以とも。悄々地ふ
れ。他と哄誘しる。悪當黒あらん。狡測巨り。這義を思召されぎそ。とふれて義持醉ゆ如
く。憶ゆ太息を吻て其頭の遠慮極めてと。然ば那姑麽姫を恩赦のゆへ。姑且
措て。そゆ支當黒の有无を。穿鑿せん。狡いふぞ。と問返されて。満家ふ頭を傾け沈吟
て。恐れるべ。拙策あり。箇様々々ふ謀りゆ。支當黒必姑麽姫を奪合うと欲ぎ。若
又支當黒あらば。一子の伴當のゆ。謀るとふとも力及ばで。その義を思ふ。起ぎて。是文
當黒の有無を知る。捷徑よりぞ。河内の臣が封内。それ自餘の人々と同かぎ。後日ふ異
変あらせじ。と思ふ。ふ義持ふ。ふ黙頭て。余也余る。如右計ひて事ゆ。赦免
せん。倘事あらば支當黒と共侶ふ首を刎てゆ。禍の根を断べ。宜ゆ段を旋し。後悔

去めよとて。悄々地に命じぬけり。話分両頭。小程に隅屋小一郎維盈いその夜艾姑
麿姫の臥房に在りぞ。夜明て知ぬ。天明て知ぬ。何麿いかと胸に潰し。且訝りて主人弁に
奴婢們に問ふ。と示して問質せど毫も照驗なし。彼岸
ドいと。いでいざ。いでいざ。つき
二とゐて外に出て。或い賣トに就て。去向を考へ。或い神社佛閣に詣て無異を祈るに。食
ざれども飯と欲せず。憩ざれども疲と覚ず。心焦燥て狂ふ。我身を責れば倶に走る。彼岸に
只呆れ惑ふて。折々要ふるとのみ。詞敵よるべくもあれ。姫上に年来の。乳学問に乳病發
狂乱去ぬ。と。此べかさに賀茂河原。と。心ふみて。あれども。浮屍に似たるものの
もなし。憶ぞ路に日を消して。その夜歌店に還るに。維盈に逆旅主人い慌しく
くなり。客人いまぞ那哥のち耳に入りひるぞや。郷京這頭の風聞を。ひひふ昨夜更闌
去時候室町の御所に癖者あり。御寝所近く潜入て。殺せんと欲せ。御運愛
たく見出されて。上へい差まり。ぞ。その癖者い女子なりと。矢庭に搦捕られ。とぞ。却件の

癖者に仔細と拷問せられ。舊里河内の楠殿の餘類。姑麿姫と吸敵る。
二八可の美女なりと正可ふ。ひひ似るを以疑ふ日取も。礼ることなり。客人
連なり。女中と年の齢さ。口合なるも亦奇。然り方ざるでひ。あ宿い克ふ。何里
へとも快立去りて。我々毎に連係の出来とるあり。女ひとふ。維盈吐嗟と騒ぐ。胸苦し
ちと。推鎮めて。氣色ゆも見さぞ。そハいふ。とるぞ。ふ。れ如く我倶しる。少女を深窓に
下ふ成長りゆめ。れば。鍼より外に持ちもるる。日屠ふ似ける。夜に深て。ふる無正
事せられんや。疑ひ人ふるべ。非除。疑似の惑ひ。官府沙汰ふ及ぶ。その人なり。我
ふ解ぐ。等ぞて分明なん其頭に。懸念去のふ。ふ主人い強難て。心ひとく。ふ。
辞して奥へ退りけ。恁而隅屋維盈。躯て枕ふ就れども。胸安らねば。寐も睡れず。
左さる右さる思惟ふ我姫上い幼稚より。文学ひの。ふ。武藝ふ疎ぐ。ふ。
甚ざれば一夜の程に。御心猛可に悍くなりて。室町殿に殺るんとぞ欲。那里に潜入りけん。

まと定かぶるとそれども既ふその名を知ていれば。あくびを決めかろう。風声実あんまりそる狂病の所為ふと。御本心ゆいあくざるべ。這義を以室町殿自訴と赦免を請禀さん狡不ごきよ虚実を知ぎと漫ふ惴らび毛を吹て疵を求るとのもあるえいふまべ死と肚ふ向こ腰ふ答て通宵千々ふ枕を摧けども。その甲非とて夏の夜の暁ともあるぞ明ふけり。徒而その詰朝逆旅主人を貸坐席の客子を覘い獨来て又維盈ふ聚くやう。昨夜話ーまうーしる。那女癖者ハ管領白田山殿奉りてけふ黄昏ふ賀茂河原ゆ首を刎らるとゆえたり。因て這頭の甲乙も路次の障りを敬言の輿夫役を知るのふさあり。幸ひ而て那罪人の宿所を穿ら問れども左ゆも右ゆも影護ら。快々出て出ぬのー不義知の不の字でもいられ家是非ふ及ぶぞ官府さゆへ訴禀ーて。後の出示を免るべ。その折然ゆるとられて維盈又ゆーふ憂ふ患を思ひる。主君の先途ふ腸断離れて。存命べく思れども却あるべよあーびれ。ゆう孕ふうち領ていりて趣理りへその罪人ハ我倶ーる少女るード。と思べども。いまぎ見ぎれば

今這里ゆて相論んハ無益似ら我も河原ふ立出てその女子をえて後ふて自他さ疑ひを解くべ。れ望ふ任ーて今宵より異宿と求るとものかるもあーぬとそぶ。王狡石狡見を。ゆ。然ふまでふ強顔くらふとろハと苦々しびふ寄めてそぶ侭主人を退ーて更ふ又あのよゆ。綽既ふ十ふーて。ハッ九ッハ実と成る。姫上一期の大厄難と今ゆーふ疑ふとろハ縱その罪極るとも素是女侠のるられば乱心と許て恩赦と乞ふても允されぎ共倍ふ死えのこ。是より外ふせん術ゆと思ハ決め。行暴より袴と出て遽ーく身装て彼岸ニる去向を示ーあるさて逆旅主人ふ然ハ氣ゆく告別ーつ種卸を畠山満家ゆ第と投くやく程ふ維盈猛ふ胸痛まそ心地悪べく覚ーび路傍ゆる茶店ふ立ーて発児ゆ兄ゆ提たれども。めらべくもあーびれべ彼岸ハ驚ハて。背と捺らるびるふ厠所を知れば效もるーに。ことゆるぞ茶店を詰れて茶と買今ゆて茶店の家々ゆ湯を請ふて維盈ふ薦めけり。これふよりてゆ維盈ハ僅ふ死ざるとゆて息ゆる程ふ力ふーび獨

東京堂印製

頻りに焦燥つゝ嘆息つゝ常に病ひ心痛の恁猛可き發りに昨の朝より今朝に
曳姫上のあん與に千萬无量の苦勞をしる故にてありしも爲些一癢らに非除杖に
推乃至も投ゝ之快ゆ思ひんやと只管に氣を將太きに病痾に勝んよりのそれば昼に既に
傾いて下晡に成るに付け小程は維盈に病着き發く癢りて立出んとして又思ひ姫上の御
際期に今日黄昏時候に賀茂河原にと守さるに今より一て管領の第に邁び轍の
鮒と枯魚の市に訪ふに似て心盡しも奈麻与美の甲斐無所為に成り抜べ屠殺途に
出迎へ綽佶々と訴く听れぞそれまぞ人に成て推ぎ姫上と刺殺しなりて真土のあん伴者
人に是切てのるるべ吁小ゝと肚裏表に處分を定めければ茶店に家々に云云と欽を
舒べ茶銭を還して彼岸に至ねてかぞつゝ思ひけり浩
の處に人居に東西に走り違ひている夜御所に潛入る那女癖者に三條河原で斬ってそ
這方と投て來るぞ路の程に某の町より山の町に今朝に河原でるん皆に

呼ひけり罵りて賀茂河投て言ぞる綽の怒劇に維盈に裏く胸に鎮めもあへず彼
岸に續けとて頻りに走る衆人を拜來に路の程に六七町に前面より居言の
士卒苛めくうち戍に來る網轎子に問でもある姫上るんと以へいらく足を早めく
近つ隨よくれば満家に士卒に雑兵約十四五名鈹 又捍棒に引提て前後を
戍るもあり路次の准備に蕉火材に勝げて肩に担るもありて先に逐る聲高やれ
問僅にかに維盈透さず声とりて人々雷妻時名のその轎子の内に世に風聲に
笑える姑麿姫刀祢に在下に姫の伴當隅屋小一郎維盈と喚るめ言隔
昨の夜艾歌店に姫上在さぞりのひと天明て知て昨も今も往方に常にまあ
風聲に驚に怒その夜に狼籍言語同断綽の趣奇怪なれば在下年來傳義
ひる乳母夫でいへ人と做りと知るに素是女性のそれば萬支優し弱
に風に敷れに魂猛に入変りに樹爵燈に心乱れ故にそれに在下這我

け。家へ訴へて恩免を請まゝんと思ひ今朝より猛可ふ心痛の病病ふ嬰りて路去あへぬ意そぞも将息ふ時と穏しく今ふ賢ゞ各々這度を美引て後の御沙汰を待んと存じ在下今より管領家のあん宿所へ推参して恩免を願ひまゝるべ然とも既ふこの期に及びて兼引かゝりと思はれるべ主従一期の辞別要時見参せまくネ。ふの義を允ーぬこゝ。とらひつ躯て立ると推隔る敬言固の頭人篠持媒鳥と喚做を似而非猛者猟猴敵たる眼と瞪ら。家臣のゞ声苛立てあるそ狼籍る白物る。女子とも大辟不赦の罪讞ゞそ斬るゝと伴党ふもあれ轎子の網と外て汝ゞ逃ゞ出せんや況恩赦と願ふとそ。御館へまゐそ還るまで殺戮ふと駐めよとらるゝと欲武士ふ似げ今。法度を知ゝ奴島許の身勝ふ必是支党ふ恐許ゞ言託せ罪人と奪畧る。奸計るん。這奴ゞ外ふ隙と覗ふ同悪の餘党躯て。這頭四下ふ見ゆ。ゝ兵们先這奴ふ。捕ふと呼れゞ美ふと両ゞ名捕索ふ繰ら。衡と寄せて。そ維盈の左右ふ。肱臂捉んと闘ふる。綜の勢ふ寛るゝ。

維盈ハ倒ゞ逆覚期のうゑれゞ身単ゞも這衆人と殺散して姫上ゞ奪合ふる欲ふ克ぞハ姫上と刺殺ーまゐらせそ。冥土のあん伴ぞべれと死と訣めゝる勇悍十倍寄るとそ侭搔抓ゞそ。勇ゞ行ゞる両ゞ。浄ゞ原来癖者逃ぞると嘯て雑兵十餘名鋸刈捍棒を閃めゝうち揮て。競蒐ゞと物もせぬ。維盈ハ二尺有餘の刀と。是ゝと引抜て敵ふと擇ぞ。殺立々々四方ふ當る。千変萬化了得ゞ楠氏の股肱ゞ一人目覚ーかけ戦ふの初ゝそ彼出庄ハ怕れて近くハ立ゝぞ。量取も劇ゞ。夫刀音ゞ眼眩ゞ胆落て怵ぶくもあゝぶれ慌慾ふ。暮初る間と討れて逃亡け。尓程ゞ雑兵们ハ維盈一人ゞ殺散されて頭人媒鳥共侶ふ網轎子さ器械さ棄て敗北ぞたりけ。快ふの図ふと息吻ふ。維盈ハ外肱と太股ゝ流る鮮血の痛痍ゞ屈せぞ轎子ゞ横る網を血刀ゝて。斫拂ひて戸を推開そ。これぞあゝ什麻いゝぞ。這轎子の内ゝ是姑麼姫ふ。ゝ。四五十行もあゝけ。一箇の圓石ゝ。けれゝ。原来敵ゞ謨られゝ。今ゝ千萬悔ても返ぶ。這

これみつ

まとり
有像第二十四
竹裡投石能碎泉兵乱箭

里迄て狗死もこんようるか姫上の御先途と見果てんと獨語て走り去らんとせし程ふ後れて來る二の隊の雜兵その數約四五十名前ふ逃る雜兵們も又引返し競來て癖者の那首ふあり逃去る遣るを喰つのみ初ま懲りて近くい寄せず遠笠前ま撫て射て捕れとそ間ふく發つ乱箭と維盈ハ刀とそ砍拂ひ又斫落し高く來る笠前い倫て脱し低く蜚越遣錯して這と先途と防げども其身鐵石ふくれば肩尖外脛那這と射削られなる數ハ処の矢傷ふ憶ぎも眼眩して忽地撞と仆れら登時雜兵三五名寄て撫んと衆人ふ先たらて走り寄る程ふ岩ハ引けく傍ふ一叢竹の裏ふ入て礫と打て及蝕てどく先ふ找し雜兵々眉間両眼鼻梁各々窮所を痛く折れて齊一苦と叫ひつ象棋倒ふ輾轉ぶ程もあらせず那竹叢ふ入て打出を礫の精彩或ハ十間二十間遠しといへども免れのみ弓ふの雜兵七八名その餘も大く打破れて怯ぎ潰と退くふる時ふ件の竹叢ふ武士と覚し一個の旅客忽然と走り出て逃る敵ふ目もかけず遽く維盈と扶起し肩ふ

樹て飛び似くふ走り去るを迫ふ入る雜兵們ふ那人と叫ぶを竹數茎陰ふ身敵ふ又研と打て去ふ入んと思へば左右ふく趕ぎ付て這時既ふ日ハ没果て十七日の月のまゝ出ぎ這里ハ二條と三條の間ふ河原ふ近く人家稀ふ今ふあれ近比ふの兵火ふ焼も残らぬ古樹緑竹のみ処々ふ路と遮り叢立て去向安定まらず程ふ河容々と維盈と捕ふ留ふ姉且と叢竹の頭ふ近つ笠前を射かけて敵の有死を試みるふ寂寞として音もせざれば原来他們一名の外ふ支黨ふるるふ一人ふ逆勢毛を吹て疵を求め鈍き小刀ふ及ばず然とて條持媒鳥も困ん果る面色ふ沈吟ふ却て衆人逆知るを這空轎すの御計畧ハ那姑麿姫の支黨の有先を知ん與ふ尚中途ふ狼籍ふ及ぶ癖者あるべ漏さで捕ふと仰付られけるふ絶ふ一個の伴黨の維盈とふ奴ふ途ふ愁訴ふれば狼籍とのいかさふ壯佼們ふ大く性起し捕んとするふ還て他ふ殺立られ我ふ不覚と合るを所詮立かつて稟さんやを

僕ども那網轎子を守護して三條河原まで赴くに中途で狼籍に及びしめ入るべし。但
姑麻姫の伴當。隅屋維盈と吸做まあり。その愁訴のよりて途中轎子を遮
り留めらるる夜姑麻姫の狼籍の素乱心の所以を糺して憶ぬ罪を釀せし在下管領家
の推参と。這度を自訴を恩免とまるうんそ来るを權且聞あれと。呶言かまく
口説くを一二の壯佼ども辟めて。計策をとらひ捕んとするに他も亦大く怒りて憶ぬ
聞詩及び程は浅痍を負ひしめられども熟られば捕稠て撃る悩し追走と。姑且其
首を屯すると四下を渉猟いと。件の維盈のまふしそ支黨とてかいるまでと衆共侶ふ立
かるひ出と恁報まるべ外のあるべ皆とく這度を以て。問ってるべ口と合れ脱落をそ。
と密語けば大家然と點頭て現阿頭の方便妙然もまま勢の俺ども這那抵戎禀
るべ絶は一個の維盈と毒ふ辟易まるとゆえるべ罪を免る処。そを云云と彩を附て方僅
阿頭の宣ふべく禀さべ越度をふべ皆まるるてひとのれて媒鳥の髪撫拊て然べ退ら

ん准備せよ快々立ひとい。そぜべ。雑兵ども断破られる。網を結べ轎子ども被て抬起
あり或は燧を鑽蕉火と点しと先は立もあり。その餘は棄る器械を拾抗げ刻を敷せて。
篠持媒鳥共侶は金瘡を隠を陣笠の黒紋も折ふ合鞆袖鞆さへ破れる疼痛は浮腫
も満家の第を投ていそだけり。窠下某生再説那折維盈を肩ふ担て走り去る逆旅武
士は島夜ふ紛れて逸快く三條橋をとち渡と。日の圖のくふ赴くと既ふて幾町くん人家
離れる樹柱の間の編小なる佛堂あり。木像の観世音菩薩の巣は絨られて臺座の
上ふ立ての這堂頽破れて守る人絶てふクーグ足穴竟と維盈を毒を下壇ふ卸る程ふ
下弦の月さ一升と。影隈もなく明るけり。登時件の旅客は懐探りて遽く定心丹を
出と左ふ維盈を抱て起。固く閉る歯を推甘げ。茶を推入れて吸活るを介抱る困
るべ。維盈も為く息出て眼を開て左と右とるふ。認られ壯佼ふ勧られるとを
且訝り且歎び。抑和殿は何里の人ぞ我身と敵のるは渡さぞ扶助て這異俱

たる情の程こそ有がけれ。所以いかぞ名告らせ給へとのたまへて件の壯佼は落る涙を振捨りて。
名乗は楠譜第の忠臣隅屋小一郎橘維盈さるでいまべ。と問返されて維盈は疑ひなが
ら點頭て問ひ奇く我こそは數多ねども楠氏の老黨隅屋維盈でいぞや。とふか壯佼
堪難け泣んとて声を呑て然は我身の実の親なるかかり死家なるの大人我身五歳の比
うとよ生涯不通の約束也。大和の宁ヨの石倉氏へ養嗣に參らるるこそ是復市也
いぞや。と名告るに敬馬く維盈は歓ひ地も八尺に増も鮮血を流れ深痍の苦痛を忘るま
でに成ると答て原來和郎は復市殿ぞ。扨我兒とは何ぞ。有數に成る乳貌何里
や母は肖るけりそも訝し。今宵の再會絶て久しき和郎親子今は大和に在らずして。伊
勢の国に氣は戦吹く風の便りは伝ふ一の見るとかた這身の果は京師に死天の旅衣
きて苦しき胸紛の這里に環りあんと嘆の中に幸ぞ。やよふて我危窮を奇くも
知て資けるその縁由報よ快と問へば復市瞼を拭て言長くとも稟まべ。苦しうぞは

聞ぬ兒養父は携られて。伊勢の壹志の国氣城へ移り住し六歳の春十三年の昔
こそ。這年の秋養父の奇々身故りぬ。一方も奇く哀しかりを父母の折々慰めて勿
泣そ。奇々はあれ。その明の春後妻を奇くも取りぬ。後の奇を携子
あり。五歳は奇男兒なりけれ。そは我弟なせられて。倶は母子を奇の萬支
初の奇々は似む。折々觸ては堪へ。奇は知る。父々は陰と陽奇。特き奇兒。
慈しく八九歳なるとも習せ武藝を教て。頓蛉なるは秘しそ亀も告られば実の
親そと思ひ後の奇々は其頭のよりと奇く父々は知りけ。意は恢なるは折へと仇る
罵りそ和郎は大人の子はあるに素生は河内の楠浪人隅屋小一郎維盈と嘆使ふ者の
獨子なりしと年三の比は蜂六刀祢ぐ生涯不通の約束也。徒養合なるはいとそ這家
也生れぞ。家子態そ傷痛れ一郎も大人也義理あるに我が與也血を分る子と
とて誉は奇あるねど萬支は就て大人にぞ。恥ぢ心太く親のふと聞ぞ。と叱られを初は

非と雖流し。後に疑ひ度思ふて。然もあるけんと思不乗てようと父々に問ひ。父々に
遂に秘し難て。這身の素生佐々とあん身の孤忠の粹の趣姑麻を姫上と養育に與ふ
這身を遠離て異姓の人の子に做される。情由を初て告られしより世に端を発身をぞ知る。
涙の河内をつゝく。心に祈る神風の伊勢にも高砂山にいれど深く歎くこの恩いかで寔の
二親に。おもかくほう思へども隨意ならぬ世をうちて不乗て。幾の年を過しなる。去歳に児遊俳
より。輕巫一隊に召出され甘本甲のみに属られて。石倉復市安次と喚れり。そを又奴々の醋く
やあるけん。屢々爺々に説くられ。上のヨメとなり。狡貪なる亦兒と漸々に疎き果て。二郎を家を
嗣せんと思ふ氣色に見れる。低く情由でいへば這身あるとて一家兒。一日も口舌絶ざる。然び
竊に身退て二親達の情願の隨に二郎に讓んと既に深念とすれども。仙台より類育の
親に答る孝も盡さぬ。卑職とも君の禄を食ぶる甚麽ぞ。功もなく已が隨に辞し
亦さぬと影を隠さば。是不義と不忠と折を等しきなくとあるとと思ひつゝある程に

這月の初旬。公役の伴に立る途中。憶ぬ必死の厄難あり。を脱れて浪華の浦に来ふ
けり。登時見おろす。郷国に這身に死地に入て人食活りと甘ぶりに存命なる甦生に似
たり。這折をして身退ぶ。親の心の安かるべく。君に不忠の刃もあり。這里より河内に赴て
いざ実の二親達に對面をと報恩に却介後に進退を定んのをと尋思とたる。
折ふ一個の行伴あり。あも捨かたうあれば。相倶して河内へ赴て隙なる八九村を諸紛く
奴々に再會して。我ら又養家の。詳に告亦せんば。奴々の歡び大くて泣もの笑も
あり。大人いかなる日姫上の高野詣のあり伴に立ぬ。ひとり日数を歴るに。
此の姫上の御所望を。都見物をされんと京へや立ちぬ。とか猜しても奈せん二夜廿人
夢寐のあられば。いで心を慰るべ。折ふ思ひ。もるく。你の来ぬるを幸なるに。京まで高野
まれ快赴て御安否を訪ふ。ゆゑ。我胸に稍安らん。遊莫月数の過られば高野に
在もべ。京へ出るべ。ようの。ゆゑ。平に實の父子でも面認られば不便な

らん。案内に一個の伴を隷べ。その姿を美引めさせと宣へとの理りなるに児も亦一トは驚く。大人は對面せまやりければ一説に及び諾い稟りつ那行伴へそぶ俗に八九の宿所に留措く。

作とろに農僕を案内の與に従へ。京師を投て急ぐ程に件のる他い鞋瘡に足を破られて後ることなるに及び恁々の地方で會んと契りつ。児獨先へそて昨夕京師に着五條頭に歌店を投てる他を等ども来き折々廝宿の旅客ども。その徒に話を聞くに河内の楠殿の餘類なる。八九の姑麿姫と。喚做こる男婦人の号夜室町の御所に潜入て上を殺すなりんとあるる折忽地に事顕れて那身を搦捕られる因て明日の曙昏に三條河原へ牽出されて首を刎らるゝと聞くるに未曾有の異聞珍説却も世に凄き世に怪女子もあれば有けるとに胸先ち驚かれて。夜一夜睡らぬ程に。姫上搦捕られるべ大人もいでて脱れるん然とて今ちせん術あり明日其河原に赴て事実を見會るを殺して君父と俱に死ん倘又其処に武運盡ぬ。敬言固の奴ども殺盡して姫上并に

家その大人を極めて共に影を躯え。孰の方にも二策に一策に衍ると氣を励し天明て歌店を出るまで那身他いまで来ば河内へと報まゝ。侯着に。侯ば捨て終日街衢を徘徊て猶風聲を窺定むるに。左右に程まで黄昏近くなり御際期の時に後れじと悄々地に縛の准備を做に武藝に覚えに。身材高れば旅月力も人に劣んや且我身幸に年十二の比より心にもなく擲覚に礫に熟ぜ。我ぶ百發百中の修練れば布裏と買含てる応の小石をヨク藏め身装まろ。その推乃て河原に投て急ぐ程に途を亦復風聲あり目今恁々の処を恁々の捕賊あり。その故に箇様々々とに正可に件の事を遠見まに有て間道を走て来るのあるべ。恁れば その網轎子の内なる姑麿姫上及管領の雑兵に捕稠られて挑戦に武士に必我大人なんと安も猜て些も礙説せを飛ば似くにその投るに走近着て悄々地に云るに斫破られる網轎子に大に云る圓石あるのを。姫上に云へるを大人に居ヨの雑兵が射

生を征箭前に防難て既に危窮の折柄れば吐嗟と駭ぐ身は單身弓笠前を持る又勢に高つ薪を肩て火に近つる石を抱て淵に臨む無謀の男戰死て功名要そあれと其頭、る竹藪に身を潛つ隊自得の礫を飛て近着く敵を打仆し甘ぎを切て我大人の必死を極ひまあらせしは是切てのあるぞ心のとる姫上は什麼いふあらのあらしもやと問ふ歎ら過去来と今の憂患を云云と報るを漏さず聞ける維盈は俯無る頭を抬て憶ぞも含笑れつつも頷て遠微妙に和郎が挿に那轎子の姫上在さぞそも満家の計畧あそ支當黒あらば四引牛て搦捕せん與るに我は然るよりあると思ぞ姫上今番もん舉動は是御櫛彫氣に変瘡ぞ御心乱まて故るんと猜ふれば管領家へ自許あく恩赦を乞禀さんと尋思つて歌店を出ふ猛可き心痛劇きて略去あぞ期は後れたら任れば河原へ赴て他まよかぞ姫上を刺殺まあらせそ真土のあん伴もぞけれと思決めつ急ぐ途ぞ那轎子は遇ひしぶりと告推留めて云云と陪話るを敬言固の頭人なは疑

ふて搦捕んとつるふるの已上を汲ぞ苦戰て初は這奴ども殺散し網轎子をそら啓て是れば姫上まりはさぞ謨れけりと躊躇ふ程は推捕稠る新隊の雑兵近く找まで射抵る衆箭を乗妾時は防ぎたりけれぞ這身鐵石るしぶれば終は徒る深痍は倒中は在きめ面目見は我不小心の為る旦姫上夜を深て潜出るあり夢も知ぞ天明てよりら駭ら。あん往方を索難て世の人の噂ふよりて囚れぬ。縛の趣稍も知て做事毎は齟齬ふ去るも天秋命るるる忠義の與は遠離て年を歴ける獨子の幇助はよて仇のふは捕れん首級を食留て終は西は入る夜ぞ今宵の月と日の國の觀音堂を死所と定世の後は彿ササとる憑むは復市和郎のまぞ少くぶ定は養家の口舌は身は退分養父母の意は怒ふりあぶ不孝は義は庶る死ぬべるける大尼ぞ侠客かくぶとも豈甚は不忠るんは必ず奇ふけは再會は果ても絶ぬ血脈の天縁徒は

今般ハ憑る瀬あり。舉て死めハ子へけり。願ハハ今より我志を接て又只姫上に御際期まで看なりて拯ハ救ひまろれ及びがたハあれ尤と奪合より深く隱しと御菩提を吊ひまろれか。それも克ゑめるべ一人とも怨敵と輙く捕て姫上の死天の如伴まろん哭。適孝と忠と義を河内へ還る我魂ハ影ハ立形ハ添てよハたりと思ハえ。遇ゑがりけ獨子よあて今般の迷言ハ死れと誨る親まろ忠義の三字の微りせバ徒ハあらじと物部の意地ハど苦しめるるとハ毎ハ息絶て憑微に光景ハ復市悲歎遣る方ゑへ何言で家ゑの大人數人所とも痩ハ浅ろ。便宜の方へ俱にまゐせて醫療と盡さバ本復あん死と益ゑとハと慰れも維盈ハ耳ゆも被ず頭と掉て安れ復市愚と生ゑ親ハ拘つゝて憑ゑるの疎略ハ為バ環會ハ少ゑバ。いでや我かゝる療治ハ和郎が心と安くせん錯憑むと腋挿の刀と抜て袖巻添て脇腹へ刀尖異終と突立れば吐嗟と駭く復市ハ有數ハ親の義ゑ男ハ差て合るも禁めず南無阿弥陀佛

弥陀仏々々々々々と頻ハ唱名維盈頭をうち掉て鈍ハ復市後際限ア益ゑ菩提と益ハ念せんと。快ハ錯て屍骸と隱しね快々立ゑと急ぎども復市ゑ胸も立難てもゑ理ハ伏れども年来ゑまゝ欲ゑ一念届ゑ実の親ハ會ハ幸ひを有ゑ自殺の折ゑ環の來て又遇ハ死ゑ哀別離苦ハ腕癱れ足疼て立ハ起れず大刀も合ゑれぞハ甲非ゑ叱ゑとも親と輙ゑ刃ハ入ゑ。その義ゑハ許さぬとハひけてよくと伏沈めバ維盈も今ハ衰ハよく衰る氣と励て好々然ハ和郎と憑ゑ和郎幸ハ恙ゑ河内へ還ゑ日もあゝバ我死ざると母ハ報てその折菩提と吊もせよ。欲去々々とハ声細る苦痛ハ屈せぬ勇敢ハの隨ハ右ゑのくゝ引続らゝ血刀と抜合抗ゑ項ハ當て両ゑを揖て身みづゝ頭搔落て俯たりけ。噫男ゑ哉維盈ハ其の性柔和温順ゑ老實ゑゑとハとゑく絶て怒と見ざ言寡ゑ長ハ其の風ゑ。ゑれども事ハ臨て死ぬとも辞せず。肚裡ハ忠魂義胆あるのゑゑとゑて正元の撰ハ

畢玉堂印發

あて託孤の命あり。不幸にして功なきまゝ。身は乱箭の與に射られて屍を野徑に瘞むとへども。天又その子を復び與てよく忠義を嗣ぐあるべし。惜るその智は手を展ずる所あり。是を百四郎に比れば。その終焉いよ〳〵相似てその趣同じかゝ。且その忠信捷れること萬萬々是を館英直に較れば。智慧は維盈英直に勝れり。宇宙の間往とて何の処か照對ならんや。野史みづから批して云。維盈は是真勇英真は是真智智勇その差ありといへども。孤忠苦心郎は甲乙なし。嗚呼忠義の哉噫嘻忠義の俱に侠中の奇士とすべし。

自評に云。姑麼姫河内に在り。時剣侠飛幻の術をもて京師へ赴て足利義持を殺さんと言。高野山詣に假託て維盈を招て京師に旅宿し。夜艾に獨室町の營中に入るに及びて事發覚れて身は捕捉れ維盈をも殺さんと至れり。是求て自作せる薛子にあらずと看官批するもヨカルベし。豈あらんや然んや鄉高に姑麼姫その師の別れに誡を稟て且剣書を燔れて當夜宿所に還るに及びて飛幻の術衰て初に似ざるを知れり。あれども

今茲の春より。御受禪の風聲あれば。餘怒再燃して。堪んとするに勝ず。又義持を殺さんまく思ふ。既に仙孃の誡あり。是を破れば違誡の罪あり。破らんと欲すれば餘怒沸て志処なし。且剣侠は素是一流の仙術なれども。行ふ所真法にあらず。姑麼姫その師に送誡をよろこび。暁得るようさあるに那北山の復讐を世に知られんと。足利義持を重て京師に到るに及びて。復飛幻の術を用ひ。窮に先考の墓に禱て成敗を天に儘す。これを雑盈に告ざるに。他と死地に置んと與にあらず。生るとこれを諫られて事の做さるを知れば。女侠の心君父の為に素より一死を辞せず。縱憐愍の実情あるとも。その伴當の安危存亡を茲に及ぶ迄あらんや。未然に這箇を諭すは前回に仙孃の四言四句に亮々たり。作者の用意を知るに足らん歟。

按るに石を投てよく物を中るは。むかし唐山に二四名あり。水滸傳に浪子燕青張清は世の人これを知ざるなり。張清はその名高和送事は水滸の作者の寓言。這箇明の呉門の彭興祖が第彭某小石を袖中に

懲めて鳥雀に擲ぜるに応じて殪れざること多し。五雑組に部に云へる又曹國の武大智とふもの幼より自得なる投石の技に精妙を十歩の外に投ずること一後に武舉して秦中令に至るに因て地方の云人と捕るに石を擲ちて殪さと斃すべきを中に人と刃を去て害を做を虎氏の三兄弟も武大智の石に碎れて捕れり又猿飛と呼ぶる吸做を偷兒あり。武大智これを釋して且捕賊使に做と。投石の技を教るに猿飛と云その技を学ぶて俱に功あり。六合内外瑣言（卷十六 猿飛編に載せ）白皇國史源為朝の従軍に八町礫紀平次大夫あり。保元物語に云へり。投石の技あるとして城の載せ云へるその綽號に據て推量れば是も投石の妙を為べし。八町礫は拙編弓張月に載て既に云へり。しかれども又本集に一人あり。上に録せしめ合て和漢六個の投石人と做べし。

第二十六回　正直命を稟て姑麼姫を送る　彼岸二謬て八九莊を鬧す

却説石倉復市八父の自投の男まことに義て泣音を立ども男方もまた哀傷に雨做を涙と拭いつ。先本村に辛きまりて亡父の頓生菩提を念じ次に父の亡骸かたち向ひ額を付て生るが如く慰る回向に時を移けり。却て帰るべきに帰れば外に立ぬ那這とかれば這御堂の背に老たる一株の垂楊柳あり。又十歩許東の方に山の井あり。吊桶にて吊桶にて井の水溢れて纈々と流れり。井方に深く數の中に桶の綫を阿伽桶あり。這頭に総て土潤ひて最柔らかれば左右に穿掘て亡骸を深く埋め父の刀をも土中に藏めて巨石を居て表に考へ小後件の阿伽桶の桶を推固め水を汲て堂内に流れる血を洗ふと數回その事ども終に果て比夏の夜短く月を傾て東に旦明む彼誰時に石倉復市は登時復市は親の送命の重れば姑麼姫と共に生死を其里に決んと今ゆ尋思に及ぶども世の風聲を漏さば竟に那期あらんか大人の推量に差ふとて姫上に存命て図に在を毒思に天を明さば詣る人を怪れ

昨の歌店のもの〻狩京師の町を徘徊して暮て那里へ宿んかと思ひ難く悄然と路立程に
夜あけ。もり。天の明て茂林を離るゝ鴉の聲ゆゑ驚かつ遽く父の新墓伏拜に伏あがろく立鳥の翅
まぐ乾ぬ鴨河原三條橋い昨夕の影護さゆ路易て五條のくさへ赴ける人程ゆ曾
領畠山尾張守満家い家臣篠持媒鳥仁汪進ゆる姑麻ゆ姫ゆ支黨のなるー
ようを守知りけれ次の日宮中へ出仕て美義持公ゆ禀まをる臣御諚ゆ從ひまるて那計
畧の趣を家僕仁ゆ云くらさて。さく試ひ〻ゆ姑麻ゆ姫ゆ荷擔ーる悪黨いゆ。
唯隅屋某甲とゆ喚做ーる伴當二名ゆ。那轎子と途ゆ遮りて愁訴あるよーを禀
せーかとも家僕仁これを聽きて追走ーたりけれ仁後い轎子ゆ障るゆゆ。
と惜ゆ守えゆを遮莫那姑麻ゆ姫ゆ父楠正元を曩ゆ京師ゆ潛登て鹿苑院殿義満を
狙ひまをりーゆ事立地ゆ發覺れて誅せられを懲まをゆそゆ女兒として今番の重罪赦
されゆ免めるんを又格別ゆる御仁政ゆ。赦免の御沙汰ゆ恐れるゆ猜ーまるゆ。

御禁南帝と御誓約のまゆくゆ。ゆゆ那方ゆの憤りを洩して世を長閑ゆ。
治んとその賢慮ゆん偶その弐ゆゆ愚計ゆ。ゆゆ義持ゆ微笑く現
猜されるゆもゆ。又那少女ゆ狼籍い狂乱鬼病の故ゆんとゆゆ。且一休の
云云と論ド禀せーゆもゆれゆ恩免の沙汰ゆ及ひ。ゆれゆ宣の狂病ゆゆ虎と放ち
山へ還ゆ後患ゆと思ゆ。その計畧い甚麼ゆゆゆと問れて満家さゆと応ゆ
膝を找めて屋四下をゆるゆ近習い迫後方ゆ伺て左右ゆ人のゆりーゆ折てゆれ。
と声を低めて今姑麻ゆ姫を赦免して河内へ還ーゆゆ遠ゆゆ結果ゆ後の患ゆ
除くゆゆ笠壽策い餘のゆゆゆゆゆ。那女子を恩赦の折その忠孝を賞させて金千兩を
賜るゆ。姑麻ゆ姫居ゆの錢財をゆゆ猛武とゆゆも婦人の情ゆ。忽然ゆ心驕りて。衣
食の快樂に及ゆ。且河内ゆ山賊ゆゆゆ仲の金を奪人を夜襲ゆ打入ゆてゆん。
那家從類稀ゆれゆ。姑麻ゆ姫みゆゆ衆賊ゆ當りて命を其里ゆ殞ゆ。君い他を赦

正儀降参の事南朝編年紀略に正平廿四年正月二日とあり。諸説互に異同あり。〇楠木式部少輔正直ハ花営三代記康暦元年七月廿五日大將家拝賀散状[illegible]路次[illegible]供奉布衣[illegible]馬打参次第の條下に見えたり

免のうへに千金を賜る御仁心世以感しをるべく。姑麻姫をバ山賊の手を借りて殺さ
るれバ一事両得後患なし。其の義ハいへど耳に稟まじ。義持しばらく聴く其の策
よしといへども那少女ハ理義に強く縦忠孝を賞せらるとも我賜ものを受べからず。言葉に
ある属せしとられて満家沈吟して。その義もせん術ハ之件の金一千両ハ小倉の院天皇
より賜るよしに仰渡されけれバ。推辞むことを得べからず。若又金を賜りても山賊をみ死るをも
もへ別に赤愚計あり。それを又異日禀上ん河内ハ臣が封内也。遊佐河内守あのところへ
ども姑麻姫の進止をよく知るところなるべし。茲に究竟の一人あり。密謀して那少女の
隠秘眼目になされなバ萬吉又便宜よからん」とのたまふを義持許りて其ハ何人ぞと問のへバ。満家
答てさきに件の御要に立べきものハ別人ならず年來當家に仕へまつりて貳ある事なし
〇楠式部少輔正直之上卿知召るゝ如く他ハ楠左兵衛督正儀が二男にて往る
應安二年正儀當家へ降参の折鹿苑院殿疑ひなくて輒く御許容

[illegible]斯波義将[illegible]京都將軍譜[illegible]

なさりしかバ正儀即便その子三郎正直を質として御所へまゐらせたりけれバ。その上にて御許容
ありて躯て召上せて御對面の折正儀龍尾といふ大刀を進らせけり。あれども久しく京師に召
措れず大和河内の扞城として那身の城へ還しおひし。精悍なる軍功もありて永和四年に朝敵
天授四年三月廿八日に薨りぬ。然れハ件の正直ハそが侭鹿苑院殿に昵近して奉公実なり
ければ采邑壹萬貫を宛行れて式部少輔になされたり。なかんづく應永十五年五月六日鹿
苑院殿薨御の折正直諺るところあるによりて出仕を禁じめ篭居して其年來になりたり。
いぞ這回召出して河内にて些なる荘園を賜らバ正直再勤の御恩を感して奉公
他事あるべからず。且正直ハ姑麻姫の正しき叔父でれバ姑麻姫心悍くもあれ竟ハ他に制
せられて頭を拾ることなかるべからず。若又逆意ありとも正直すばやく注進せバ誅伐在便宜
なる妙計にハなきや」と誇貌に耳に禀せバ義持屡額きて。その議宜に宜しからん然バ
自餘の管領ともも召べしとて。前管領義將入道義教義淳満元們その

宅も送なく聚會して。よしと示して再議の上滿家の謀立地ゐられて。姑麽姫ハ赦免せられ。楠正直ハ蟄居を免されて。次の日出仕して。拜謁せ祈。義持即便滿家を。姑麽姫の罪過の顛末并ゐ他と赦免のゐ。就て楠正直ハ。本貫河内の石川ゐ。莊園五百貫と賜ふべし。姑麽姫と俱して。那地ゐ赴て居宅ハ九の邊ゐ造て。悄々地ゐ姑麽姫の動靜と覘て他ゐ異謀あると知べ。遊佐河内守就盛と謀り合て。速ゐ注進せべゐ。その宅の嚴命恁々と詳ゐ傳達して君恩かくの如くゐれ。和殿萬支ゐ小心して大功を立らべし。功あゐ舊領と返しのべし。と仰られゐ尊意をうけゐ正直謹て三度兼ね辭ゐ。滿家然てと點頭て。那姑麽姫ハ後日の比河内ハ還ることゐべ。和殿速ゐ准備して。宅着と推乃姑麽姫と共侶ゐ首途せべし。又那少女の伴當ゐ隅屋甲と狹吸做せめ。一両名あると。今ハ這地ゐ躯れとゐん狹ようと毎坊の故老ゐ徇示し。人們と歩ゐ出て。姑麽姫ゐ隷て返し遣せべし。這笑もちろゐれよ。と最詳ゐ示さる。正直狹び意外ゐ出て。君恩と辭し。身暇と賜りていそく退ゐ出ゐけり。爾程ゐ這日より。姑麽姫の伴當京の坊毎ゐ索られゐ。石倉復市ゐ宿投る那五條ゐ客店ハ。綽の趣ゐえゐ。這時復市安次ハ世の風聲と拷ゐんと。書ハ那這と徘徊せし程ゐ那案内者ゐ他ゐ鞋瘡稍愈て尋來ゐ遇ひけり。折ゐ姑麽姫と赦免のゐ。并ゐ伴當隅屋甲們を召出し主ゐ隷さ。河内ハ還せべしとある。正直ゐ下知狀と巷毎ゐ懸られれべ復市ゐ。これを見て且狹び且疑て。肚裏ゐ思ゐ。今故もゐ姫上の罪と免されゐ。と。是しゐ。我身伊勢ゐ在り。折人の噂ゐ聞ゐるとあり。那楠正直主ハ正儀卿の三男ゐ。親共侶ゐ南朝ゐ叛逆もゐ。武家ゐ仕へて。栄利を貪る人ゐれ。非除那身ハ姫上の叔父公とそうち解ゐ。那主の計策ゐ。姫上の伴當と。四引寄せ搦捕て。俱ゐ誅せん與ゐるべし。と思ハ。俱と。五條の歌店ゐ還て。ゐ。姑麽姫と赦免のゐ。并ゐ正直も共侶ゐ河内ハ八九ゐ赴て。今番新恩の莊園ゐ移住むとゐ。詳ゐ傳ふ。復市編ゐ。

さていそうと
原来富言ゐ〳〵ぶゑ。縦計畧ゑれども。狐疑ゑて名告り出ぎもあらぶ怯しく主と言ふふ
似くら。然ることに我身ひとつゑ〳〵で君父の與ふ恥辱を左も右も姫上と安危と倶ふ去べれ。
と處分既ふ決りければ逆旅主人と招ゑよせて。咱們ハ鄕高ふ河内より姑麿姫上ふ倶しく来
たる。隅屋復一郎安次并ふ奴隷ゑ作とふるのゑ楠殿へあのよゑと許稟ゑのか。とふるよ主人ハ
一議ふ及ばぞ。あらべ御沙汰あるゑん折表。明日より漫ゐをせで徐ふ考せゑゑ〳〵冥く計ひゑん。
と答て駈て遽しく外面投て出ふけり。密下甘某生再説室町の営中ふハ楠正直再勤出
仕の日ふ罪人楠姑麿ゑ姫と獄舎より出て赦免ゑ将軍義持異日ゑ変さんとそ那身と
正直ふ預けゑる。正直それを奉りて。且姑麿ゑ姫と宿所ふ伴ふ宅眷ゑ管けて勤り仕。正直と
姑麿ゑ姫とハ年来義絶の叔父姪ゑれ。這時初て對面ゑ然ば正直の宅眷とハ。ゑ
迭ふ不意しとゐ解ゑるとゐ。恁而見参の日ふゑりゑ〳〵正直即使姑麿ゑ姫ふ浴湯
結髪ゑ促し。准備の礼服ふ更させ轎子ふゑち乗し。倶しく営中ふ赴んとせし。折ふ

ふゑ。姪女の伴當隅屋復一郎安次并ふ奴隷ゑ作と喚做ゑの。五條の飯屋ふ在。と
ゑ。今朝召よせ。耳房ふ置ゑ。伴當ハ這方より。隷れば不足ゑれゑ。他們ハ伴ふ
立んとゑふ。這我ゑ姫眉ゑ頻早ゑ。我伴當ハ維盈ゑふ復一
安次と名告ゑ。ハ是奈ゑゑゑ。その復市ハ維盈ゑ獨子ゑ。仰た時石倉君ゑふ生
涯不通の約束ゑ。そゑ養嗣ふ合〳〵しゑと。豫て聞ゑ。復市ゑ這里ふゑ。こゑん該ハ
ゑ。是のゑゑで我れて来ゑる。奴隷ハ彼岸二ゑりけふ代ゑて。他ゑ来ゑる。最評ゑと
ゑれ。ゑ疑ふて胸安ゑ〳〵ぞ。ゑれけり。不程ふ正直ハ這日巳牌の比及ふ姑麿ゑ姫と伴ふて室町柳営
へ赴く程ふ復市ハ他と倶ゑ主の轎子の後ふ跟て正直ゑ伴當們と齊一柳営ゑ。
ゑけり。その日出仕の毎ハ三管領四職七頭の人々と首とし。能州谷満実宮満重們ゑ。
まで坐席と正一威儀と整ハ咸正廳ふ並維列ゑ。當下楠正直ハ姑麿ゑ姫と伴ふて席末ふ

室町柳営
姑摩姫謁
義持
有像第三十六

なる程ふ姑且と義持へ公管領満家と先ふ立て小扈従ふ大刀と持て出て上壇ふ着玉へば近習們翠簾と捲揚るを暗躍す大家額つけ時す満家仰を受先姑麻る姫を召近着て室町殿と拜せむ者れども姑麻る姫い長揖と敢拜せず开方と伝と程す満家仰を伺へいつ。楠姑麻る姫義れ汝父楠正元い往る應永五年の比先大君鹿苑相国と犯しなんと欲せふ縡立地ふ發覚れて誅せられと知ざる歟先度す懲ざ今番の狼籍その罪実ふ萬死す當れり者れども其の做い所素是狂疾鬼病の故ぞ其本心ふあらざるより。寛解亘ぶ者のヨヽあるそ左まれ右もあれ欲する所忠孝れ據るふもあらざるふその身女流のなれば格外の仁慈をもその罪悪と糾さる及れず即禁獄と釋免す故郷へ帰し遣さる世ふ有ゝ所囚恩をらく頭ふ載せて後々まで忘て上ぶく。叔父正直ふ従ふ勉て良善の婦人とるべ。折ゝ嵯峨の太上天皇山。後亀山。縡の由と聞食ん路費の與一千金賜ん金を下さるべよ。仰合されられ仙院御資料の内とそ。數のごく賜ふのみ足倹祖

先の忠義とその身れ孤獨と憐ぶふ。叡慮の係る処るべ。快拜受て退ぬ者れ。と厳ふ言示せば金司の甲乙両二名千両箱を其ふ載て吊のそ姑麻る姫ふ遍與ひ。者れる姑麻る姫い。歓ぶる氣色もなく。満家ふ向て。御設兼ねれ妾過世の方ゝ。雖伏ふ七みづから量らば螢蝋の斧とて隆車ふ對ひ崇い覿面助りかゝ命ゝ。許さるのい幸ひる。歓抑這身の不幸る歟是歟非歟愚るれば辨へかゝり。昔異邦漢の高祖い蒯徹と誅ず者。寛仁の君といられ今番の赦免も跖が狗の。吠と吠る外ふ。と稟さば傷痛るべ。況や崇ふ人けも。小倉の太上天皇ふ這千金と賜ふ指腰る武家と憑ふ言依さ。ふ有かゝるべ御因恩と願ふ今より後々まで御誓約差ふとる。持明院殿大覚寺殿迭代ふ天日嗣と知召るめ者べ妾が病者痍果て。罪ぬ者ふ事と要せば室町殿の御武徳と辱く思ふ。れらのようと斟酌ぬ。あげあらんとあと願ゝくと仰れとふ言奏る辨論ふ大家呆れて醉るが如く現逞ふ義女ふ魂

倭の儔い和漢ホあつて再罪と沼はるもと陷ぬめるつけ。倭られども満家ハ容易能しくそぶ
仮ホ且姑麻ゐ姫と退かん。又正直と召出せと。仰を伺ふ三初のごと。今日午後ホ及ぶるもよろこく姑
麻ゐ姫ホ相俱しと。河内へ首途致べく。雑兵居ヨヌ隷らるるも道中由断をべからず。勿論那地ホ
到りて隊も仰付られ。ごとく。回今ちろと屬て那狂病と看とべ。功ホより恩賞あん。
快々退の出ひと詞せちゝき火速の倭達正直推辞む氣色ゑ。言義果て姑麻ゐ姫と俱と
宿所へ退る折件の金ハ復市ゐ遞与しとる他ちろ駝しつ。その身の宿所ホ還りて求れがゑ
聚合る差遣の雑兵略式衣ゑ百四五十名宇養并ヨ姑麻ゐ姫の伴當小荷駄を令一
て。二百餘名と伺えろ。猛可の起行ちけれ只眉ヨ火のつゞ。上と下へと復しる。冗紛ふべ
あらぢしと。ゑうなくヨ東西と収めて下浦ホ京師と發り。倭れ今宵ハ二三里ゑて其景宿
と定めて。頻ホ路次と。ゑ急ける。這回ホ看官の精しろ情由ハあり。原ホ満家が
姑麻ゐ姫と害せんと。悄々地ホ智計と旋らと。義持王ヨ説薦めしハ素是所以ある

満家ハ大父白山義深并ホ父基國ゑ時よりて。ゑ〳〵河内へ推寄せと。和田楠を攻
撃ると。この年と歴る程ヨ南朝元中の年ヨ至て。和田正武い病死ん正勝ハ異と喪ひて。
孤城と守る勢ひ窮り。千剣破と没落ちろしく。這時將軍足利義満ハ軍功ヨ賞
と。河内と甘基國ホ賜りて。加恩の地と做せしよりて。その身ハ京師ホ在りとの。遊佐就成を
遣しと守護代と。今ホ至れり。ちろよ這回姑麻ゐ姫ゑ搦捕られて詮議の折満家胆裏ホ
思ふ。那姑麻ゐ姫い女流ホ似ける。心烈武勇の勁敵ゑ。武断ヨ疎と沙弥一休の法談
助言と容れて。赦ヨ遇ふて河内へ還しハ我封内の患ひと上の。怒りの冷ざる間ホ誅と後ホ
生えおけんと。ゑ寸思と。ちろしかば。訟獄司ホ上目と示して首と斷ずと欲せしホ姑麻ゐ姫ゑ
仙骨ホ。且活人草ヨ服しる。神效ホよろ。その刃或ハ折れ或ハ曲りて那身と戕ふと克ハ然しば
絞殺せと。二三回絞しせしホ布まれ索まれ皆断離て。殺せと。ゑ沼ざるしかば。満家驚ゑ且
怪ゑ。又鴆毒と用ひ。それと驗るしかば。原来那奴ハ神佛の冥助ある。盛久景清と

傳るゝん。食を禁めて乾枯せよとぞ。その日より七日七夜。水だに與へざりけれども。姑摩姫ハ自若として。饑渇の氣色なかりけり。是より満家又術を易て姑摩姫の支黨を搦捕せんと欲せしに。その計亦當らず。既に赦免の沙汰定りて。誰何ともせん術なければ。更に義持主に薦め。那千金を餌食にしたりし。姑摩姫の心を蕩し。且楠正直を俱に河内へ遣して。他が厭勝にもなれと。計較するに左の如し。然バ又義持主も。劉邦頼朝を師表にせバ。寛仁大度の君子ならねど。一休の諷諫に。妒忌暴慢の熱腸を。殘りなく洗れて。心裏恥しくなりにたるに今姑摩姫を赦したる。南朝の殘將們まで徳を感し。後に憑思ミて叛くことなかるべし。然バ一個の賊婦を赦して。億兆の人の心を攬る。妙計なりと思ふものゝ。然とも快からねバ。又満家が稟して薦る。計を信容れて。儀のごとくに行ひたり。當時の人情想像るべし。○間話休題。今程に姑摩姫ハ。その夜逆旅の歇舎にて。那隅屋復一郎安次と名告る。伴當を召近着て。初て對面なしけるに。まづそれも認ぬ壮佼へ。許しなる限りなければ。向まく欲しう思へども。側に叔父正直の宅に着ぬれバ。默止ならず。復市も亦父の為に。我らくさすに恁々と報る便りもなかりしかバ。只恙なく帰御に及びし。歡びを舒などして。言語宜く退にけり。登時姑摩姫思ふやう。那復一も維盈ゆゑに。縫殿助も背る処あり。且維盈が子の名ハ復市。他が名も復一なれバ。別人にあるべからず。什麼ゆゑにて我窮阨を知りて。尋來て。今番の伴當に立けん。寔に奇しき事なるに。維盈がありし時ハ。捕れて害されし。狄然去夜驛の大望を秘して。歇店に送り置れしを。痛く恨みて自殺をしたる。狄胸安からぬことなるに。問ふ人のあらざれバ。現靴を隔て。痒を掻くに似たりけり。大凡ハ會も別るも前知あることのなるに。今問ずとも八九分へらバ。妙知る暇ハいくらもあらんと。竊に思ひ決しても。只生憎に維盈のみの心にかゝり。八九の宿所へ帰着まで。便宜の折なかりしかバ。報られもせず。問もせず。空閑に旅宿を過しけり。話分両頭。春秋ならず。刻にも過ざりもせず及ざるなき彼岸二八の或日。隅屋維盈ハ。篠持媒鳥に捕稠られて。已ことを得ず雑兵の十名を防ぎ戦ひ。折戦慄れ慌惑して。

逃走ること一里あまり。その夜と洛外なる客店に曉せしころ。竟に京師に足を駐めぜ。爲
追隊のがらん狹と思へいとど影護さに書の樹の間山の蔭に立てゝ。夜と上日とゝの路
次と言ひて八九の莊院にかゝり來て。悄々地に報意をべるのあり。とのひゝべ。縫殿い驚
且訴りて。奥へ召入れて對面を登時彼岸二いる日獨姑麻る姫ゞ室町家へ夜襲
捕らるゝとの事の顛末ゝ後隅屋維盈へ途に管領の士卒に捕稠らるゝ。
必死の血戰に及びゝ。ものもあつたもせず隨に。詞ぜゝく耳に報ゝ。痛ゝ姫上を網
轎子に乘せられて。既に河原へ赴くべ程なく數れるひけん。その折に隅屋主も居
痛瘡と肩へ助るべ命まあゝに可一已辛ゝ。虎の腮と脱れゝ一日を
まく這大變と告ずるけんと思ずるに絹にかゝりに。とゝ胸先塞りゝ。縫殿いるを
什麼いに思せ。甚にもべ。とゝるに涙忽地雨のごく拭もあへず伏沈そ。絶沒るまでゝ
泣ゝと。ゝ孕に思いべせば姫上日屬のあん行狀ゆそ然る勇悍ゝに挙動ゝ。ゝ做

されんに。縫殿のあのとても然まで思あゝぬと彼岸二ゞ呼衍ぢ思ひ憐めて見るごとく思
ひやあゝん人言ゝて惑ふとれい市に虎と致をとゝゝん常言もあると狹ゞ謀ぐい
要るべとるべ。幸ひにて復市を往日京師へ遣ゝられ右まれ信あゝん便りを
まに思ふ優とあゝゞ。と尋思ゝつゝ彼岸二に口を禁めて一家見る。奴婢に知せ深く
秘して。後の音耗を待程に坊間の風聲漸次に聞えて姑麻る姫の夜襲る禁獄に
又維盈のゆまでも彼岸二に報るゞ。這那喝合るとヨまる。縫殿をこれさへうち
聽て原來虚談るゝ思るとゝ思べいゝ哀傷悲泣のる方とてゝ得に閑屋
維盈の妻ゝるとて宗々に雄胆あけれべ獨孰思惟に姫上幸に我所天の横死に
千回百千回ゝ數にても返ゝかゝり。綷已に分明れに這里へも捕兵を向るべ零落
たりとも。楠氏の迹を慕に逃迷ゝて。嘲りを世に送さんとゝ。その期に及ぐ家に火を放ち潔
く自害ゝて煙と做りて死天の旅先ゝ。ものゝ姫上と良人に捍ものゝ着んのを嗚呼分

ろりと胸の中ゝ大安く覚期をきろりしゝ倒ゝうちも謀ゝをそろの折の便宜と思ゝ思ゝ
日復市ゝ倶して来るいとと美しゝ少女をそ。故郷を問へゝ伊勢と答へその名を問へゝ垣衣
とぞいふる。然ゝ我兄復市ゝ結髪友の妻ゝして。倶ゝ養家と走りゝ来あゝん切て他ゝ
這世ゝ留めそ。姫上并ゝ我們夫婦のゝそ菩提と吊せん。と思ふあろと色あるゝなれど却
垣衣を示まろ。復市ゝまゝかろ来さゝ徒然ゝあゝんぎゝん。這里よりゝ程近ゝ所
如意宝珠院とゝふ女僧道場ゝ我姫上あ香華院そ。先住ゝ姫上あ。伯母御前そ
とうまゝゝ今の住持ゝその御弟子そ。智圓禪尼と喚れゝふゝ。近曽縫刺と夢ゝ
比丘尼の在ゝ。そろりとゝ夾鍼妾の欲しかるべし。物縫ひゝ。復市ゝ。かろ来るまゝ那御
寺へ紹介てまゝゝ那里へ出て。と事もゝ。そ相譚ひけ。畢竟縫殿ゝ
垣衣と。宝珠院へ遣して。後の話説甚麻ゝそや。其ゝ又次の巻ゝ。解かると聴れか。

(卅)巻驚奇俠客傳第三集巻之三終